

昔から、僕はよく変わっていると言われた。変わっていると言われても、何が違うのかはよくわからない。そのせいなのか、人よりも友達を作るのが難しい。なにも人が嫌いなわけではない。むしろ人と関わるのが好きだし、人恋しく思うことの方が多い。人当たりもいいとよく言われてきたが、誰も決まって長く関係が続くことはなかった。

この国には、特徴を欠いた無機質なビルが飽きるほど並んでいる。人々は歩調を合わせ、そんな街中を歩き回っている。けれどその中には、周囲と同じ様相を象(かたど)り、その正体を隠している存在も多い。変わり者と呼ばれた僕が、人と深く関わろうとすると距離を置かれるように、街はその姿にそぐわない歪な存在を隔離、若しくは猫をかぶるように強制する。そんな思考が伝播(でんぱ)し慣習化された世界では、歪(いびつ)な存在は鼻をふさがれたも同然だ。口だけで呼吸を強いられた存在が、その歪さを隠し切れなくなるのは至極当たり前のことだろう。

記号化された世界、それを受け入れる人々、僕はこの世界を地獄だと思った。比喩でもなく、ここはまだ生まれる前の準備、死んだ後の罰を受ける世界に思えてならなかった。

だから僕は、自分と同じく今の世界に息苦しさを感ずる者に同情するし、せめて同じ立場にたったものとして手を差し伸べたいと思う。彼らは単に、自分の認識がどう違っているのかわからず、世間からずれてしまっただけだ。それなのに、彼らはそれほど蔑(さげす)まれなければならないとは思えない。

僕は彼ら独自の価値観を聞き、その是非を語り合ったりした。大体の結論はそんな話題に是非もないというオチだったが、話すということ自体に意味があった。彼らは水を得た魚のように、今まで誰にも話していなかった自らの価値観を意気揚々と話してくれた。そして僕は、そんな変わり者と呼ばれる彼らを見ていることに、何よりの幸福を覚えた。

自尊心とは、人間がまとう最も尊い衣装であり、何のものにもまして精神を奮い立たせる。彼の作家の言葉だが、彼らはその特異な自尊心により、弁を振るい、行動を起こした。

それを眺めているのが、僕は楽しかった。そんな友人を得ることが僕にとっての生き甲斐のようになっていた。

だからこそ、僕の友人はいつもすぐにいなくなってしまう。

夜の街並みは、その暗闇に抗うように明かりを灯し続け、人々は時間を問わず雑踏を作り出している。無機質な鉄の群れが極彩色の明かりを放つ光景は、それだけで人に蠱惑的(こわくてき)な影響を与えてしまいそうだ。

人垣に遮られたショーウィンドウの向こう側で、幾つも陳列されたテレビが映し出す報道番組が視界を掠める。

『先日——区で起きた立て籠もり事件についての続報です。本日十六時頃、容疑者と見られる男が逮捕されました』

テレビに映し出された映像が、記事を読み上げるアナウンサーから容疑者の顔写真に切り替わる。

また一人、僕の友人は遠くへ行ってしまった。

昔いつだったか、学校で将来何をしたいか尋ねられたことがある。その時はまるで実感がなく答えが出なかった。今も明確な答えが出ているわけではない。だが強いて言うなら、僕は崖のふちに立って、崖から落ちそうになった誰かを捕まえる、そんな人間に私はなりたい、とでも答えるのだろう。

× × ×

私は普通の人とは違っていた。普通の人にはできないことができた。普通の人にはできないことができるから、気を緩めてしまっていたのかもしれない。若(も)しくは、普通の人にはできないことができることに、自惚(うぬぼ)れていた。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。

ちょっとした人助けのつもりで割って入っただけだった。それなのになぜか、私の目の前に刃物を持ち出した男がいて、その男に絡まれていた女の人はいつの間にかどこかに消えてしまった。

湿っぽい路地裏には他に人がいるとはとても思えない。私自身もきまぐれで帰り道を変えなければこんな暗がりになんて入るものか。

「お前を、殺せば、満足、できるのか」

「さ、さあ……」

次第に息が荒くなり、訳のわからないことを言い始めた。まずい、完全にねじの外れた人だ。

一歩退くと男は一歩近付いてくる。走って逃げるには体力差的に厳しいだろう。尤(もつと)も私には、そんなことをしなくても簡単にこの状況をやり過ごす手(・)段(・)がある。それなのに、いざナイフを目の前にすると、震えて体が思うように動かない。

どうすれば。思案しているうちに男は言葉にならない叫びとともに襲い掛かってきた。

そして、爆音が夜の静寂を破った。

襲い掛かってきた男は、私がかざした掌の前で悲鳴を上げ、腕を抑えて地面にうずくまった。赤子みたいに丸まった男の腕からは黒い煙があがっている。

使ってしまった。眼前の光景と変えようのない事実とに身体の震えが止まらなくなる。はっきりと意識を取り戻した時には、足はもうどこへともない場所に向かって走り出し、塀に囲まれた袋小路に行き当たっていた。

はっ、と思わず声を洩(も)らし、今更のように周囲に人がいなかったかを確認する。視界に人影はない。当たり前だ。こんな狭い通りに人がいる筈もないというのはさっき自分でも考えていたことじゃないか。

壁に身を預ける。寿命を削るように激しく脈打つ鼓動の音が、次第に弱まっていった。ようやく一息吐く。

「こんなところにいたのか」

背筋が針金を刺されたみたいにピンと伸びる。いつの間にか一人の男が視界に入っていた。もちろんさっきの狂った男じゃない。身長百七十前後の中肉中背、無難に整えられた黒髪。服装が黒一色ということを除けば普通を体現したような青年だった。

「えっと、どちら様ですか」

妙に冷えた汗がうなじを滑る。つい数分前の光景を見られていたのかどうかはわからないが、今は努めて冷静に応じてこの場をやり過ごすしかない。

「僕は黒崎と言います。単刀直入に訊きたいのだけれど、さっき君は掌から火を出したのか、それとも爆発を起こしたのかい」

見られていた。この男は私が魔法を使ったところをはっきりと目にしていた。

「何言ってるんですか、手から火？ そんな魔法なんて使えるわけじゃないですか」

緊張のせいか出てくる言葉がやけに芝居がかってしまい、愛想笑いも自分でわかるほど露骨に引きつってしまっていた。

「なるほど、さっきのあれは魔法なんですか」

しまった。余計なことを言うのはどの口だ、私の口か。……完全に混乱していた。

青年は顎に指を当て、ぼそぼそと何か呟きながら考え始めた。私の台詞とは違い、芝居がかったしぐさに微塵(みじん)も仰々しさを感ぜさせない。むしろ仰々(ぎょうぎょう)し過ぎるからかえってそう感じないのかもしれない。

「別に脅そうってわけじゃないさ。ただ興味があっただけなんだ。随分変わった人だと思って」

微笑を浮かべる青年の言葉には、裏に隠れた悪意や恐怖といったものがまるで感じられない。文字通り、ただ感想を言っているようにしか見えない。

私のような、得体の知れない相手に対して、この男は顔色一つ変えない。その姿はある種超然としていて、魔女なんて異端な存在である私が畏怖を抱かずにはいられなかった。

塀の上で、黒猫が呑気に鳴いている。

× × ×

人を殺すことは悪いことです。この平和な日本では誰もが教えられてきたことだ。親から、教師から、名前を知りもしない他人から、その戒めは植え付けられてきた。洗脳と言っても何らおかしくはないほどに。故に洗脳された人間は、まだ洗脳途中の子供からどうして人を殺してはいけないのかと尋ねられても、論理的に答えることはできない。

男はそこに疑問を持っていた。人を殺すことはそれほど間違っているのか。なにも、理由もなく人を殺めることを肯定していたわけではないが、この男は理由のある殺人を、少なくとも否定はしなかった。

「つまりあなたは、人を殺すという行為を裁くにも、然るべき分別が必要だと」

「上手く言えないが、たぶんそういうことだと思う」

赤城という男に会ったのは二年ほど前。彼は連日のように裁判を傍聴(ぼうちよう)していた。他の人々が厳めしく耳を傾ける中、彼は自身の苛立(いらだ)ちを隠そうともせず、むしろ滲みだしているような男だった。形勢の悪い被告人と親しいからとも考えられたが、赤城はまったく別の裁判でもよく同じようにしていた。僕は彼に興味を持ち、声をかけて幾度か議論の場を設けた。

「復讐や正義感で殺しを行った人間はそれほど悪いだろうか。彼らは血迷ったわけでもなく、あくまで理性的に道徳的にそうただけだ」

人気のない夜の公園で、彼は必死に訴えた。

「あなたの言う通り、その判断は間違っていないと僕も思います。むしろ正義であると。だがその殺人を肯定してしまえば、あなたが憎む悪はそれを盾に世間を跋扈(ばっこ)するかもしれない」

自身も理解していた壁に、赤城は切迫した面持ちで頭を抱える。家族や親友ならいざ知らず、知りもしない人間の死を何年も忘れることなく、これほどの関心を抱いていられるのか、僕には理解できなかった。だが理解に苦しむ異

質なものを見ているのはそれだけで楽しいものだった。

「だが、結局奴らは法を盾にいつかはまた出てくる、自省もなくまた同じことを」

「署名を集めて死刑でも訴えてみたらどうです。きっとあなたのように考える人も大勢いる」

「そんなものは無駄だし、信用できない。法を振るう奴らなんてどいつも過去の事例を引き合いにしてでしか罰を下せない腰抜け共ばかりだ。市民もまるで他人事のようにしか考えない。中には死刑反対なんてことも言い出し始める輩もいる始末だ」

赤城は声を大にして反論した。僕は思わず笑みが洩れるのを禁じ得なかった。彼の論理は確かに正しいかもしれない。だがその言葉はあまりに正直で、一辺倒(いつべんとう)な見解だ。赤城の理論は誰も考えることだろうが、まったくと言っていいほどの綺麗ごとには過ぎない。彼は盲目に、適当な理由をでっち上げる容疑者を擁護(ようご)し、理由を証明できない善人を排除している。普通なら気付くがこの男は気付いていない。虚実だらけの世界で彼は純粹過ぎた。

「やっぱり俺は間違っているんだろうか」

「いえ、さっきも言ったがあなたは間違っていない。けれど正しくもない。正しいと声高に叫べる者は、覚悟し、自らその正しさを証明したものだけですよ」

赤城は目を見開き、純粹に耳を傾けた。いや。本当は最初から、誰かに耳を傾けるつもりなどなかったのかもしれない。彼の耳に届くのは、彼の考えを代弁した言葉だけなのだろう。

「あなたは捕まるのが怖い、殺人が悪いことだと思っているから。だから言葉しか出てこない」

赤城は頷きかけ、思い直してかぶりを振る。

「捕まるのは怖い、俺には今の有耶無耶(うやむや)な世界の方がもっと怖い。こんな居心地の悪い思いをし続けるなら、いっそ……」

「つまるところ、実験なくしては証明されないし、実験をもってしても答えが出ないことの方が多い。だから誰しも、躍起になって証明しようとする」

「証明……」

「まあしかし、こういうことは議論に花を咲かせているうちが一番楽しいと、僕は思いますけど」

「証明……そうだ。自分で示せばいいんだ。どうして今まで気付かなかったんだ」

最後の言葉は、赤城の耳に届いていなかった。彼は繁々(しげしげ)と頷き、力強く拳を握る。その拳には、彼の覚悟がありありと見て取れた。これほど頑固で、鋭敏過ぎる感受性を持った人間だということに、今まで目立った行動を起こさないでいられたという事実は可笑しくて堪(たま)らなかった。

「赤城さんですか。どうも。実はあなたの耳に入れておきたいことがあって」

僕は眼下に倒れ伏す男を眺めながら彼に電話した。男の傍らにはナイフが落ちており、黒ずんだ腕には火傷の跡が見られる。

「実は、今——の路地に通り魔が、ええ、はい。では僕はこれで」

電話を切ると、うずくまった男が僕を見上げていた。

「黒崎……」

「近頃は惰性(だせい)であったとはいえ、あなたとの討議がもうできなくなるのは残念です。友人として、来世も瑞々(みずみず)しい感性を持たれるよう、精一杯の祈りを捧げます」

喘(あえ)ぐ男を尻目に僕はその場を離れ、走り去った女の子を探した。この世界は退屈なようで、退屈と切り捨てるにはまだ惜しい。

× × ×

老朽化したアパートの扉が、古さに悲鳴を上げた音を鳴らす。こんな時間に誰だ、と思わず舌打ちしたが、誰であるかは考えるまでもなかった。

「黒崎ですけど、白石さんはご在宅ですか」

いちいち律儀な呼びかけのせいで、居留守を使おうかと考えたことに若干の罪悪感を覚える。丈の長いジャージに足を絡め取られそうになりながら、のそのそと玄関に向かい、わずかに扉を開く。隙間から見える顔は、マンガに出

てくる目の細いキャラのような微笑みを被(かぶ)っている。男が手に提げたスーパーの袋をひょいと見せたので、私はそこでようやく扉を開ける。背後で、現金だなあと洩らす声が聞こえたが、無視して部屋に戻った。

「相変わらず空っぽな部屋だね」

「開口一番に喧嘩売ってんの」

「非難しているわけじゃない、それどころか称えているくらいだ。就職活動を始めて一年経ってもフリーターの人間の部屋としては、正に理想形だ」

いつもの人を食ったような言い回しに、またしわが増えるのを感じて溜め息を吐く。確かに部屋を占めるのはちゃぶ台と冷蔵庫ぐらいなもので、あとは必要最低限のものしかない。四畳半の部屋は二人いるだけでも狭く、節電のためにいつも明かりを小さくしているから余計に怪しい。同い年の娘に見られれば、啞然とされるか大笑いされるかのどちらかだろう。改めて評価してみると悲しくなるだけだった。

「居(い)た堪(たま)れない気分になったじゃない、どうしてくれんの」

「何のことはよくわからないが、とりあえず頭を下げておくよ」。

気を取り直して、黒崎の方に手を差し出す。

「何でもいいから、とりあえずメシ」

「君も大概失礼だと思うよ」

この優男と出会ったきっかけは、言うまでもなくあの通り魔の一件だが、その後こうして食事の席を共にするようになった理由は曖昧だった。

黒崎とは連絡を取っているわけでもないのによく道端で遭遇し、その度に食事を奢ると言われた。最初は警戒していたが、毎度のように奢られているうちにただの食い扶持(ぶち)としか思わなくなっていた。決して餌付けされているわけではない、とは思いたい。しかしそのことを踏まえても、なぜよく知りもしない男と凝りもせずつるんでいるのかと聞かれれば、しっくりくる答えは見つからない。

そんな相手を家にまで上げるようになったのは、この男が私の秘密を知っているからだろう。それなりに親しくなっておけばそれだけ私の迷惑になることをしなくなる筈だし、何よりこいつ相手に今更あれを使うことを隠さなければいけない理由もない。いざとなればいくらでも撃退できる。

「えっと、ハンバーグに、唐揚げに……」

「注文の通りに買ってきたが、少しは栄養バランスにも気を遣った方がいいと思うよ」

台所で袋を物色する私に背後から何か言う声が聞こえたが、話半分に聞き流した。

鍋に水を注ぎ、冷凍の商品を温めるためのお湯を沸かす。もちろん私はコンロに手をかけない。鍋を右手に持ち、左手を鍋の底にかざす。それだけで私には十分だった。

私は左手の掌から小さく濃縮した炎を出現させる。手品でも何でもなく、私の魔法で。

私は魔女だ。比喻でも皮肉でもない。古くからヨーロッパに伝わる、人に害悪を与える力を秘めた存在であり、中世に教会から迫害を受けた対象としても有名なあの魔女のことだ。私はその魔女の生き残りの子孫だった。

このことは絶対に知られてはいけない。二年前に亡くなった母親から私はずっとそう教えられてきた。実際私は魔女ですと言っても信じる人はいないだろうけど、魔法を見られればそれは別だ。だから私は魔法を絶対使わないようにしてきた。使うのは、精々が生活を少しでも楽にするためだけ。

その禁忌(きんき)を、私は以前破ってしまった。自分の身を守るためとはいえ、現に目撃者を出してしまった。

「二十一世紀の日本に魔女が住んでいることもだが、まさか魔法の用途が冷凍のハンバーグを温めることだとは夢にも思わないだろうね」

ほっとけ。

最初に私の魔法を見た時から、黒崎は顔色を変えることも、ましてや疑うこともしなかった。面白がってはいるようだけど、それだけだ。見られたのがこんな変わり者だからまだよかったのかもしれないが、もし騒ぎ立てるような人間に見つかればどうなるかわかったものじゃない。それこそ、人体実験されるなんてことも……。

「飛躍し過ぎだと思うよ。大勢の前でもなければ、しらを切れば魔女だと言われてもただの妄言でしかないしね……あれ、僕の分少なくないかい」自分の前に並んだ料理を見てそうこぼす。

「いつもそれ位しか食べないじゃない。それにあんたは働いてないからこれで十分」

尤も、私がコンロを使わせないのだけど。

「君は早死にしそうだね」

私の前に並んだ料理を見て黒崎が呟く。ハンバーグに唐揚げに天ぷらに……と、少しばかり偏っているだけで大げさな。当然タダ飯でもなければこんなに食べることはないけれど。

「早死に結構。そっちこそいつも健康的過ぎて気味悪いわ」

黒崎の前に並ぶのは、白米にそのままのサラダと豆腐、あとはほとんど味付けもない焼き魚と私とは対照的だ。本当は、私のおかずのどれかが添えられていたのかもしれないが……まあそれはそれだ。

「これぐらいあれば不足はないよ。それにどちらかと言えば長生きしたいからね」

「ふーん。こっちはそれなりに楽しく、これ以上の苦もなく生きられればそれで満足」

常に魔女であることを隠し、それでも以前のように無意識に使う可能性を孕(はら)んでいる。漠然(ばくぜん)とした恐怖が付いて回る日々を長く続けたいとは思えない。

「どうして長生きしたいと思うの」

黒崎はサラダを食べる手を止めて、何でもないことを考えるように髪を弄ぶ。私はすでに完食しているのに、黒崎はいまだ初めに手をつけたサラダを食べている。

「深く考えたことはなかったな。でも強いて言えば、より多くの友達が欲しいからかな」

「トモダチ？」

意図せずして因縁をつけるような語調になった後、思わず笑いが洩れ出す。

「友達が欲しいと思うのは普通のことだろう」

「そうかもしれないけど。ただ一番遠いイメージの言葉だったから」

それに友達を作るために長生きしたいというのは、普通なようでどこかずれている気がした。

「心外だな。僕は元から人間好きだよ。いろんな友人から多様な価値観を聞くのはそれだけで楽しいし、そんな彼らの理解者になれば、それだけで生き甲斐を感じられると思うけどね」

「……やっぱり変わってるわ、あんた」

「変わっている……白石君は僕のどこが変わっていると思う？」

思わぬ質問につられて手を止める。いつも嫣然(えんぜん)と笑っている顔が真剣なものに見えた。

「僕からすれば、魔女の君の方がよっぽど変わっていると思うが」

「そういうとこだと思うけど」

最初に会った時のことを思い出しながら言う。

「私みたいな奴のことを、あんたはただ変わっているって言った。魔法を見たら普通それだけじゃないし、追ってきて平然と話しかけてもこない」

「それほどおかしなことかな」

黒崎は首を傾(かし)げる。依然として何を言いたいかわからず理解できていない様子だ。

「少しでも怖いとか、そうでなければ信じられないとか思わなかったの」

「怖いというのはなかったな。手から火を出せれば目を惹(ひ)かれるけど、この科学全盛の時代、火を出したければ機械を使えばいい。殺傷目的に使うにも、そもそも人を殺せる人間ならそこの刃物で事足りる。ただ信じ難いとは思ったし、それだけに興味深かった」

飄々(ひょうひょう)とそんな言葉を口にするこの男が、私にはとてつもなく歪(よこしま)に見えた。魔女だと知られたことはないから、普通の反応なんてわからない。それでも、この男の考え方が普通でないということだけは骨身に染みるまで伝わった。

「私は、生まれた時から魔女なんて立場にいる異端児なのよ。だからって、普通の人と違って一人で超然と生きられるわけじゃない。でもあんたは普通の人間なのに歪(よこしま)というか、在り方そのものが異常で、異端なの。強いて何がとは上手く言えないけど、他の人とは考えの基準というか、順序がおかしい」

つい思いつくままに口を動かしてしまい、言い終わってからようやく黒崎がすっかり言葉を失っていることに気付く。

「ごめん、さすがに異常は言い過ぎた。でも私も魔女ってことを大したことじゃないとかわかったように言われて、少しムカついてたり、そうでもなかったり……」

「気にしてないよ。ただそういう風に直接言われるのが新鮮だったものだから。こちらこそ申し訳ない」

本当に露(つゆ)ほども気に留めていないようにいつもの表情に戻るが、いつも何を考えているかわからないから当てになったものではない。

「けれど僕は君を普通だなんて思っていない」

一瞬間、目覚まし時計の秒針だけが音を立てる。

「君はその魔法を何かに使おうと思ったことはないのかい」

私が睨(にら)みを利かして黒崎を見ると、たちまち室内に沈黙が立ち込める。私にはこの男の考えていることがまるで読めなかった。

「才能の無駄遣いとでも言いたいわけ？」

「そんな偉そうな話じゃないさ。けれど君しか持っていない権利に違いはない。生まれつきそんな力を持っているなら、欲望のままに使おうと思うことだってあるんじゃないのかい」

「使ってるじゃない」

私は今月の電気代の明細書を突き出す。自慢じゃないが、最低限の料金で済ましてる筈だ。

「それもあるけど、他にいくらでもあると思うよ。例えば、目障りな人間を排除したりとか、逆に正義の味方にでもなってみたりとか」

息を呑(の)む音が洩れる。その言葉は昔の子供じみた、子供そのものだった夢を思い出させる。

「……昔は、物語のヒーローみたいに人を助けたいとかそんな風に考えたこともあった。でも両親には魔法は使うなって教えられてきたから。自分が損するだけだって思い込むようにして、自然にそう思うようにもなった」

言葉は半(なか)ば言い聞かせるようになっていた。

黒崎はそうかいと言っただけで食事を再開した。私は食器を片付けた後、空いた机に突っ伏して何もない場所に視線を泳がせた。

正直驚いていた。黒崎の質問に動揺したことに。ずっと昔に忘れていた筈の子供の夢を、こんなにも強く覚えていたことに。

あの時通り魔に絡まれていた人を助けたのは、まだ昔思い描いた姿を頭の片隅に残していたからなんだろうか。

× × ×

「鼠入(そいり)君、今日は体に匂いが残っていないか」

昼食時の大学の食堂は、講義から解放された学生たちが鬱憤(うつぶん)を晴らすべくざわつき始める。大学を卒業したのは何年か前のことだったが、今日は唯一とも言える親しい後輩からの連絡があって足を運んでいる。

「いいんじゃないですかね、研究生が血なまぐさくても」

そう言いながら、ステーキを慣れた手つきで切り分ける。

「先輩はいつもの健康食ですね。味気ないですか」

「食事という行為に、生物的な本能以上の価値を見出せないんだ」

食事を終えた私は行きがけに買った新聞に目を通す。一面の政治や芸能の記事の次には、先日と同じ連続猟奇殺人、それに今日は、その事件とは別の容疑者のものによる死体が路地裏で発見されたという記事が並んでいる。

「君は懲りずにやっているみたいだね」

「研究ですから。前にも言いましたが、俺の研究対象は深淵(しんえん)過ぎて時間がいくらあっても足りない。休んでる暇なんかありませんよ」

「その研究を始めるに際して相談に乗ったのも僕だけれどね。偶には冷静にならないと、身を滅ぼすよ」

肝に銘(めい)じておきますよ、と鼠入君は肉を口に入れながら聞き取りにくい発音で言う。

「それでどうだい、研究は」

「楽しいですよ。身体や精神、人間のあらゆるものに俺は惹かれ、恋した。でも大学の研究なんかじゃその片鱗しか調べられない。やっぱり自由に調べてこそ俺の渴望する生きた心地が得られる」

件の猟奇殺人の犯人は口の端を吊り上げて恍惚(こうこつ)の表情を見せる。彼が、彼らが浮かべるのは、無邪気な子供が見せるそれによく似ている。鼠入君も初めは人の可能性だとか医者志望らしいことを目的としていたようだが、それがここまで歪(ゆが)んでしまうというのはなんとも皮肉なものだ。

「殺人なんて人間性が悪いなあ。ちゃんと自殺志願者の人たちを集めて解剖しているんですよ。怖気づく人には少し手荒になりますけど、合意の上でのことなのに」

世間を騒がせている猟奇殺人。手足がバラバラになった遺体や身体の至る部分が形容し難い状態の遺体と、今メディアを騒がせている事件の一つだ。その実行犯は飽きもせず、血が今にも溢れてきそうな牛肉を頬張っている。

にしても、ともう一度同じ記事を見る。一つの新聞で知り合いのニュースを二つも目にするとはさすがに思わなかった。一面の政治や芸能の記事の次には『連続猟奇殺人』や『正義の人殺し』なんて、陳腐(ちんぷ)な見出しが並んでいる。面白いのはその扱われ方の差だ。前者の記事は死体がいかに無慈悲な形状をしていたか、犯人の歪んだ心理

はどのようなものであるのかと語られている。それに比べ後者の記事は、殺人犯の詳細よりも、被害者が生前いかに悪辣(あくらつ)な人間だったかと言うことを雄弁に語っている。同じ殺人と言う行為に対して、こうも恣意(しい)的な見解が飛び交えば、あの男のように理性的な殺人を謳(うた)う者が現れるのも合理的な結実と言えるだろう。

「ただ、最近はあまり実りがなくて。新鮮味というか、マンネリというか。やっぱりあんな人間には、もう巡り合えないかな」

「あんな人間？」

聞くや否や、後輩は目を輝かせて熱弁し始める。

「いつも通り自殺志願の人を募って、その時は鬼ごっこをしていたかな。皆、口を開けば許してくれ、殺さないでくれって見飽きた反応。でもその人だけは違った。頭を抱えてなんだか苦しそうにしていた」

「恐怖で怯えていたのでは」

「俺もそう思った。見ているのも疲れるぐらいの苦しみ方だったから、早く楽にしてやろうと思ったんですよ」

そしたら、と鼠入君は食い入るように身を乗り出す。

「銃口を向けた時、その人が徐(おもむろ)に頭を上げると、俺の横にあった机が吹き飛んだ。地震も台風もないのに、勝手に」

「つまりその人が、念動力ないし何かしらの超能力を使ったと」

「そうなんですよ。俺は目を疑った。あんなにも恐怖に震えたことはなかった。この世界の特異点に俺は居合わせたんじゃないかと思って身悶(みもだ)えした」

「それで、その人は？」

「その時は恐怖に震え過ぎていて殺しちゃいました。俺の人生最大の不覚でした」

こくりと項垂(うなだ)れる鼠入君を余所に、僕は考えた。魔女がいるのだから、超能力者がいたとしてもおかしくない。だが一人の超能力者の存在は興味こそ惹かれるが、彼の言うように特異点足らしめるものとまで言えることだろうか。

「あんまり驚いていないですね」

「証拠に乏しいからね。せめて第三者が認めていれば説得力もあつただろうが。君の研究は、そういうことが多い」

「そうですか。これでも俺なりに、自分の考えを客観視していますけど」

「そういう自信過剰な自己認識は嫌いではないが、だからこそ君は研究という割に、自分の主観に頼り過ぎた検証しからない。僕に相談しているように、第三者からの視点は常に新鮮な視点を与えてくれるものだよ」

窓の外を練り歩く学生たちは、同じ行列でも夜の街並みのそれとは違った趣がある。あちらは不安を掻きたてるが、昼間の学校で同じように思う人間は少ない。人の違いというよりも場所の違いのせいだろう。昼の食堂で、殺人犯が呑気に話を弾ませているとは思わないように。現代の日本で魔女が暮らしていると思わないように。

「人間は、一人一つの価値観しか持ち合わせていない。心象に描く風景は唯一無二であると同時に他人と同じものは持てない。けれど変化はもたらせる。自らのパノラマに他人のパノラマの持つ色を重ねてみることで、色褪(いろあ)せていたものが劇的に彩りを取り戻すこともある。自らのパノラマを彩ることは人の有限性を忘れさせてくれる。そういう時に生きていくと実感できる」

「相変わらず先輩の言うことは哲学的というか単に遠回しというか」

「さっき言った通りだよ。哲学者の考えや物語を知ること、死を意識したことのない人間に意見を仰ぐのも大切ということだ。古代ギリシャの頃から言われていたほどに、その重要性は自明だよ」

「死のうとしていない相手についていうのは、ちょっと主義に反するんですけどね」

「否定に出会うことこそが出发点なんて言葉もある。どうするかは君の自由だが」

こう言っていた哲学者が、生あるものが目指すのは死であると言っていたというのは出来過ぎな気もするが。

神妙に頷く後輩は瞬(まじ)く間に瞳を輝かせ、新しい趣向に思い至ったようだ。僕の友人は、おしなべて、素直な人間が多い。

講義の準備を始める学生たちが姿を消し、徐々に食堂も閑散となる。鼠入君はその波に乗らず、椅子にだらしなく背中を預けている。

「講義、あるんじゃないのかい」

「いいんですよ退屈だし。こんな話は先輩としかできませんから、こっちのがよっぽど有意義だ」

「先入観で排したものにこそ、盲点は潜んでいるかもしれないと思うけどね」

自分の言葉を改めて自問する。私自身がそうして見失っているものもあるのかもしれない。

「暇なら一つ、僕の悩みでも聞いてもらおうか」

「悩み？ 珍しいと言うか初めてじゃないですか。先輩は悩みなんてないかと思ってましたよ」

彼女もだが、皮肉めいた言葉を冗談でもないように言う。しかし存外、私はその通りの人間かもしれない。

「僕は、そんなに変わっているだろうか」

× × ×

仄暗(ほのぐら)い電球に照らされた居酒屋には、どこの席からも何を言っているのか判然としない罵声が上がっている。私が座っている座敷もその例に洩れず騒々しい。主に私が。

「あの面接官の狐みたいな目がうっとうしくてうっとうしくて——」

「それはさっきも聞いたよ。それよりも白石君、酒はそろそろ控えた方がいいと思うよ」

「ようやく、受かったんだから、飲まずにいられるかってのよ」

呂律(ろれつ)が回らなくなりつつあるが、忠告を聞いていないわけではない。万が一酔って魔法でも使うことがあればそれこそ事だ。

約二年間の就職活動が実を結んだので、その祝いに珍しく居酒屋まで繰り出した。代金はもちろん、現在ウーロン茶をすすっている黒崎の奢りだ。

「あんたさっきからウーロン茶ばかりで一杯も飲んでないじゃない」

「あまり好みじゃなくてね」

「こんな息苦しい世の中、飲まないでよくやられるわ」

「飲みつぶれて記憶を無くす方がよっぽど怖いんだ」

飲みつぶれて逃避したいほどの現実と直面した記憶もない、とでも言いたそうに見えるのは私が酔っているからでもないのだろう。

「そういえば、あんた一体何の仕事してんの？」

「以前は大学での研究をしたり、あとは転々としていたりだったけど、今は何も」

手に持ったジョッキをドスンと置く。周りの席の哄笑(こうしょう)だけが突然静まり、思わず身を縮める。けれど私でなくとも、少し苦勞している人間なら口をへの字に曲げて相手を睨み付けたに違いない。

「はああ？ 何もしていないって、じゃあどうやって生きて、今までどうやって私に奢ってきたっていうの」

最後の台詞は、自分がとんでもないことをしていたのではと、やや震え混じりだった。

「生憎(あいにく)、金銭を使う趣味がなくてね、まだしばらくは不自由しそうにない」

酔いが醒めるような気分だった。淡々とつまみを口にすると黒崎はいつもと何ら変わらず、見栄を張っているという風でもない。一瞬でも罪悪感を覚えそうになった自分が俄然バカらしくなった。

「あんたさあ、いつも余裕綽々(しゃくしゃく)としててさあ、それで不安とかないの？」

テーブルに腕をついて食い入るように訊く。さっきの声も相まって、周囲からは恫喝(どうかつ)しているように見えるかもしれない。

「特には感じていないな。むしろじっくり時間が使えて有意義だよ」

「金がなくなったらどうすんの？」

「また働くさ。今度は本でも出してみようかな」

この男の考えを読もうとすると、かえって自分が迷路に引きずりこまれたような心許無さが訪れる。

「変な気回して損した。オジさん、もう一杯持ってきて」

黒崎もあわせてウーロン茶を頼む。酒や食べ物に欲がないのかと訊けば、決まってそれとなく聞き流すだけだ。加えて金銭にもこだわりがないなら一体何に興味があるのか、思案を巡らせるほど泥沼にはまっていくだけだ。

「決めた。給料貰ったら、今度は私が奢ってあげる。なけなしの給料しか貰わない私に大枚を叩かせて、お金の大切さを身に染み込ませてあげる」

「そうかい。楽しみにしておくよ」

黒崎は依然、不敵な笑みを浮かべたままだ。不意に、いつだったか家で食事をした時のことを思い出す。この無欲な男が唯一熱を覗かせたのは確か、友達だったか。おぼろげな記憶は、新しく運ばれてきたジョッキによって簡単に流れていった。

「ったく、世の中には仕事が見つからなくて死にたいと考えてる人間だっているのに」

長々と続きそうな気配を察知すると、さすがの黒崎も顔をしかめた。だが構うものかと続けてやった。私はやっぱり酔っているのかもしれない。

「私も不幸だと思ってたけど、探せばもっと報われない人もいるものね」

「友達かい」

「灰原さん……就活中に仲良くなった娘だけど、貧乏に虐待にと、本当に絵に描いたような苦勞をしてるらしいの。なんでも一時期は、自殺しようと思ったこともあったって」

「そんな友達がいるなら、その娘と祝えばよかったんじゃないのかい」

テーブルに項垂れながら力なく手を振る。当の灰原さんはお祝いをしなきゃと言ってくれた。けれど、私だけが内定を貰っている負い目から、それは彼女が内定を取るまで見送りにしてしまった。灰原さんは笑ってありがとうと言ってくれたが、かえって気を遣わせたかもしれない。

「近頃は一人で死ぬのが怖くても、集団なら簡単に命を捨てる人も多いみたいだからね。よくあるだろ、そういう人を集めた掲示板」

「不安を煽るようなこと言わないでよ」

普段ならただの世間話でも知り合いのこととなるとさすがに笑えない。思わず心配になって電話をかけようとするが、発信のボタンを押す前に携帯の電池が切れた。もう三年以上使っているものだからか、近頃は電池がすぐに減る上、バッテリーの表示も壊れていて充電されているか当てにならない。初任給を貰ったら、まず機種変更をしよう。

溜め息とともに力が抜け、テーブルの上に頭を乗せて倒れる。グラスに映った自分の姿がやけに苛立たしく見えた。

「ほんと、魔女なら人を幸福にする魔法ぐらい使ってみろっての」

私に使えるのは、精々が掌から火を出すくらいのもんだ。実際のところそんなものは節約ぐらいにしか使い道がない。

「なら、救おうとしてみればいい」

私は突然の言葉に驚いて起き上がる。真面目に言っているとも冗談ともつかない普段の微笑のまま、黒崎はしっかりと私を見てそう言った。

「何言ってんの。私も、私の魔法も、そんな偉そうなことができるようなものじゃない」

「そうかもしれないし、そうでもないかもしれない。いずれにしろ決めるのは君だけ」

黒崎が何を言いたいか、私にはいつにもましてわからなかった。黒く澄んだ瞳がこちらをじっと見つめる。瞳に映した世界は、私が何を望んでも肯定してくれそうな、言い知れぬ居心地の良さと不安を同時にもたらしめているようだった。

私はなんとなくそれが怖くなって、グラスの中の酒に意識を投げた。

「なんであんたみたいな変な奴とつるんでるんだか」

「便利な食い扶持だからじゃないかな」

ああ、それもそうだ。

不覚にも飲み過ぎてしまった私は、黒崎の肩を借りて歩いていた。そしてさらに不覚にも、吐き気を催してしまった。

「……ごめん」

人気のない適当な路地にそのまま腰を落とす。自分のとはいえ、吐瀉(としゃ)物の臭気には顔をしかめずにはいられない。

「——辺りを見てくるから、とりあえず休んでいるといい」

何と言ったのか判別はつかなかったが、力なく頷いておいた。黒崎の姿が暗がりに溶けていく。

一人の時間が、抑えていた思考を自然に呼び戻す。自分の魔法で何ができるか、最近まで考えることすらしなかった。魔法を使ってしまった日を境に、絶対だと思っていた認識がそうでなくなっていた。

無力な——少なくともそう思っていた小さな掌を眺め、意識を逸らすように、膝に顔を埋めた。

どこからか鳴り響いた音が背中中の壁越しに伝わってくる。黒崎は依然戻ってこないが、軽くなった身体を持ち上げて音の方に向かう。

「ちょっと、何してんの」

曲がり角に身を隠していた黒崎は覗き込むように角の向こうの光景を見ていた。

「辺りを見回っていただけだよ」

要領を得ない言葉は無視して、自分で状況を確認する。

三人、いや四人。四人とも同じ制服を着ている学生のようなようだった。一人はシミのついた壁を背にして、もう三人がその一人と対面する格好で笑い声を上げている。虫の鳴き声みたいな、搔痒(そうよう)感を搔きたてる声で、聞いているだけで不快だった。時間や場所を鑑(かんが)みれば、どう考えても楽しくおしゃべりという雰囲気じゃない。三人の側の一人はいかにも猿山の大将といった、大柄の粗暴そうな男だ。

襟を掴まれている男の子は、抵抗するでも謝罪するでもなく、震えながら笑みを引きつらせている。足元には彼のものだろう財布が落ちているけれど、中身はたかが知れていたんだろう。掴みかかっている三人は彼を掴んだまま、その様子を見てげらげらと笑っている。典型的ないじめの光景に、無性に苛立ちが募る。

「何見てんの、助けるんじゃないの」

「助ける、なぜ」

「なぜって……」

冗談でも、まして怯えているわけでもなく、黒崎は本当にその意味を尋ねていた。

「あの子は僕と何の関わりもない赤の他人だ。それに下手に干渉してもあらぬ誤解を与えて逆なでするだけかもしれない。それらを差し引いても、彼らはまだお互いに一線を越えずに遊び感覚でいるだけだ。やられている側も、やられていればいいと肯定的に思い込んでいるからああして笑っているんだろう。そんな彼を助ける理由なんて、僕には見当たらない。それに、ああいう手合いには興味が持てなくてね」

「そ、そういう問題じゃないでしょ」

大声を出しそうになるがすんでのところで声を抑えてじっと睨む。それでも黒崎は、子供が不思議がるように首を捻るだけだ。こいつには、どうしようもできなくて震えるしかない人の心がわかっていない。無力感に苛まれる気持ちわかっていない。

ぐっと拳を握り、一歩前に出る。

「わかった。なら私がやるからいいよ。できるだけ自然に、干渉せずに」

学生たちの傍ら、ここからでも丁度見える位置にゴミ袋が積まれている。それを僅かに燃やしてボヤ騒ぎを起せば、面倒事に巻き込まれたくはないだろう学生たちは逃げていく筈だ。

ゴミの山めがけて掌をかざす。集中して、被害が出ない程度の火気を手に凝縮する。

けれど、火を出すことはできなかった。料理する時と同じことをすればいいだけなのに、腕は頼りなく震えることしかできていない。

私そのものが揺らいでいた。どうして私はこんなことをしている？ 黒崎の言う通り、他人のために誰かに見られる危険性を冒す必要がどこにある？ あの時使ってしまったのはあくまで自分の身を守るためだ。魔法で人を救える、そんな子供の夢をいつまで見ている？

「別に迷う必要はないさ」

耳元でそうささやく声が聞こえた。男の言葉は、まるで悪魔の手招きのような蠱惑的な雰囲気をまとっていた。

「君は悪いことをしているわけじゃない。あえて良いことだとは言わないけれど間違っているわけでもない」

鼓動が次第に早鐘を打つようになるとともに、掌から微かな熱が生まれる。

「問題は君の意志、ただそれだけだ。助けたいのなら助ければいいし、助ける価値を見出せなければやめればいい。そこに正しさなんてない。あるとすれば決めるのは自分の意思だけだ」

小さな火の玉は少しずつ膨張し、学生たちを脅かす火器としては十分過ぎる大きさになった。あとはそれを数メートル離れたゴミの山に放つだけだ。

ごくりと自分が息を呑む音が、はっきりと聞こえる。震えが次第におさまり、正確に狙いをつける。

決めるのは私の意思。なら私の意思は何か——そんな問いは最初から答えが見えていた。それを親の教えが、常識が、抑え込んでいた。

手に力を込め、弾丸を飛ばすように、掌の火を——

「——やっぱり、できない」

手に込められた熱は消えていった。震える拳を握りしめて、私はそのまま地面にへたり込んでしまう。魔法を使うとした刹那(せつな)に無数の声が脳内に響いた。両親や自身が課した戒めは、私が思っていたよりも強固なもので、そのことに少しだけ安心していた。

「気が変わったから、僕がとめてくるよ」

情けなく項垂れる私を尻目に、黒崎は学生の一団に向かう。煩わしさを表に出すでもなく、むしろその面持ちは愉快とでも言いたげだった。

「その辺にしときなよ」

三人の学生が一様に肩をびくつかせて振り返る。いじめられている学生はいまだに恐怖が解けずわなないているだけだ。

「なんですか、俺たちこいつと遊んでいただけですよ」

一人がしたり顔でそう答えるが、動揺が目に見えている。左右の二人は人形のように頷くだけだ。

「金を盗って遊びはないんじゃないかな」

「ち、ちょっと借りただけですよ」「そうだよ。なに本気にしてんの」「てかあんた何、文句あるの」

調子づいた学生たちは打って変わって強気に出る。学生や未成年という立場を持ち出されると、そこで黙ってしまう人も多いだろうけど、黒崎はそんな態度をおくびにも出さない。

「文句か。そうだね、強いて言えば……」

そう言うとやおら学生たちに詰め寄る。無言の威圧感に学生たちも呼応して退く。偶然か、黒崎と学生たちの姿が、陰から顔を出している私が丁度一望できる位置取りになっていた。黒崎の横顔が微かに見える。口元はいつものように笑みを浮かべているのに、黒い双眸(そうぼう)はひどくつまらなさそうだった。

「遊びというなら、これぐらいしてくれた方が面白い」

動きが速かったわけじゃない、むしろ緩慢(かんまん)に見えた。それなのに黒崎が学生の一人の首を締め上げていると気付くには時間がかかった。速いというより、あまりに躊躇(ためら)いがなかった。

「な、なにしてんだよ!」「そうだ! こんなことしてどうなるかわかってんのか」

数秒前まで私と同様に呆然と立ち尽くしていた二人が咄嗟(とつさ)に声を上げる。まだ正気に戻ったというよりは自分を奮い立たせるために大声を出していた。一人は為す術なくうめき声を洩らしているが、黒崎の力が弱まることはなく、淡々と首を絞め続けた。

「どうなるのか、教えてくれないか。警察に話して私を捕まえてもらうかい。今の状況をありのままに話してマスコミでも賑わそうか。君たちがそうしたいなら構わないよ。私は最悪数か月か数年の刑期を過ごし、君たちは事件の矢面に立って高校生活を過ごす。そんなところかな。それで君らはどうするんだい」

悠然と、よどみなく喋る姿は歪(よこしま)という他なかった。次第に首を絞められた学生の呻(うめ)きが弱々しくなる。

「早くどうするか決めないと、彼の息が続かなくなるよ。それはそれで一向に構わないけれど。それとも……」

学生二人が呆けたように口を開けて目の前の光景をただ眺めていた。なにも黒崎に気圧されただけじゃない。その様子を不審に思った黒崎も手を放して後ろを振り返る。

独りでの炎を発したように、ゴミ袋に火がついていた。その光景にこの場にいた誰もが驚くか、恐怖した。きっと、一番恐怖したのは私自身だ。

三人の学生は情けない声とともに走り去っていった。怯えていた一人も、知らぬうちにどこかへ行ってしまった。

「本当に殺してもいいと思ってたの」

「まさか、少し脅しただけだよ」

他に誰もいないことを確認し、ゆらゆらと燃える火に手をかざす。炎は私が念じると、空気の抜けるような音を立てて消えた。

「使えるじゃないか、魔法」

「ほとんど無意識だった。それに使えたのは、どっかの誰かのせい」

「それはまた、どうして」

「鈍るの、感覚が」

一拍間を置いて、黒崎はいつも通りの微笑みに戻る。

「そうかい。何にせよ、君は自分自身の意思で他人を守ったことを誇っていいと思うよ」

目にした光景も、耳にした言葉も浮世離れしたものに思えた。正体のわからない影を前に、自分の理解や価値観の何を信じればいいのかわからず、足元が崩れていくような不安。

今になって、酔った勢いでこぼした言葉の答えがわかった気がした。私はこの男とすることで安心していた。行動も思考も価値観も異質に見える人間に比べれば、魔女というだけで異常だと思っていた自分が矮小(わいしょう)な人間に思えた。

黒崎とすることで、私は孤独を誤魔化していた。私は自分の存在を、正当化しようとしていただけだ。

× × ×

鳩が豆鉄砲を食らったという表現はいまいち判然としないが、正に眼前で繰り広げられているものがそうなんだろう。そうかと思うと、落ち着きを取り戻した食堂に哄笑が響き渡った。

「なんですかそれ。今年、いやここ数年で一番笑いましたよ」

彼女と同様、僕が自覚していなかったこと自体に疑問を抱いているようだった。何を笑っているのか釈然としないがそのまま次の言葉を待った。

「変わっている、なんてものじゃないですよ。俺の知る限り、先輩ほど変という言葉が体現している人はいませんよ」

変わっていると言うなら鼠入君も私と同等以上だと思うが、その言葉に対しても彼は口に含んだお茶を吹き出しそうになっていた。

「にしても、なんでまたそんなことを」

「以前知り合いに言われたんだ、僕は在り方そのものが異常で異端だと。境遇で言えば彼女の方がよっぽど異端だが、僕に比べたらそんなものはちっぽけだそう。僕の考え方や基準は他の人とは根本から違うらしい」

「僕が言いたいのも正にそういうことですよ」

お茶を飲み直し、いいですかと教鞭を執る講師のように振る舞う。

「俺みたいなのはただの変態。趣味や性癖が偏っているだけで、それも元々同じような何かに魅せられたに過ぎない。でも先輩は違う。先輩は魅せられた変態じゃなくて、ただ先輩というオリジナルの変を体現した存在なんですよ。雰囲気とか、発する言葉の一つ一つが周りに合っていない。それでいて、たばこや薬みたいに妙な中毒性のある香りを漂わせてる」

「そんなつもりは更々ないけれど、それにいまいち要領を得ない」

そういうところですよ、と呆れて両手を放り投げる。変わり者という共通点以外は彼女とまったく似ていないが、先日と同じ反応をされた気がする。

「変わっているってことはわかるのに、何が変わっているかはよくわからない。先輩の底の知れなさとか無欲さみたいなものに触れると、こっちが逆におかしいんじゃないかと思えてくる」

「それだって先入観さ。私だって欲や生き甲斐はある」

「たとえば？」

「できるだけ多くの、友達を作ること」

しばしの静寂が立ち込めた後、それを吹き飛ばすように「トモダチ？」と、忌々しいとさえ思える語調になったかと思うと、また声を立てて笑った。どうにも既視感を覚える反応だ。

「今日は何回笑わせてくれるんですか」

「重要なことだよ、特に今の君には。さっきも言ったように、君はもっと他の見方を知るべきだ」

「だから友達を作れと。でも僕、あんまりそういう人いませんよ。いてもだいが前に殺しちゃったかも」

白屋堂々物騒なことを言ってしまうても、ただの冗談にしか聞こえないから質が悪い。

「そういえば、先輩のことを異常だと言った友達はどんな人なんですか。先輩の変人ぶりを言い当てられる人なら話が合うと思うんですよ」

多様な価値観に耳を向けるべきだという助言を、鼠入君は本当に聞いていたのだろうか。尤も彼女が彼の価値観に賛同するとは到底思えないが。

「君とは似ても似つかない人だよ。一言で言うなら……魔女だ」

ついさっき鼠入君がそうしたように、魔女という言葉を一きなり持ち出しても何の信憑性もない。

魔女という響きに目の前の狂った後輩はますます食い入る。彼がどんな魔女を想像しているかはわからないが、おそらく彼のその想像には合致しないだろう。

「魔女……なんだか面白そうな人ですね」

「そんなものじゃないよ。彼女は普通の魔女だよ。すごく普通の」

「いっそ本物の魔女なら、俺があの日会った超能力の正体もわかるかもしれないのに」

僕は苦笑しながら携帯の時計を確認し、席を立つ。あまり卒業した人間が長居する場所でもない。

「まあ言われたことは努力してみますよ。あと先輩も、そんなこと言うなら先輩が第三者として協力してくださいよ。医学や心理学の知識なら先輩の方があるでしょ」

「考えておく……いや、なら早速一つ試してみようかな」

胸を踊らせながら視線を送ってくる後輩を尻目に、携帯を開いて一通のメールを送る。

「今はどうやって被験者を集めているんだっただけかな」

「ネットの掲示板も偶(たま)に使いますけど、ほとんどは口コミですね。裏の方には顔が利くので」

「そうか。差し支えなければ、今度の被験者は僕が選んでもいいかな。そのネットの掲示板から」

彼女は自分の本質に気が付き始めている。彼女という人間が本当は何を望み、何に焦がれているか。多くの人間は、自分を自分たらしめる根源とでも言うべき自尊心に気付いていない。他人との関係や教育が個々の人間を画一化してしまう今の世界では、それに気付く機会すら与えられない。生き方に正しい姿が決定付けられ、競争や欲望のかたが判を押したような世界なんて、想像するだけで吐き気がする。だから、自分が自分であると証明できる人間はそれだけで貴重であり、生きていてだけで面白い。

彼女がそこに気がつきつつあるのは、魔女という型破りな概念が介在しているのも一因だろう。しかし権力や金銭が人を変えてしまうと言うが、実際は何も変わっていない。ただその人間の本来の在り方を助長するだけだ。その結果が似通るのも元々人間として共通する部分を持ち合わせていたに過ぎない。当の僕は、金や権力にあまり目が眩まない類だが、それだって所詮強度の問題にしか過ぎない。故に、その類(たぐい)まれな強度を示した人間こそが、自分を証明できる。

僕はこの世界のことを地獄だと思っていた。ここはまだ僕が生まれる前、あるいは死んだ後に送られる地獄なのだ。

だが今は、そんな思い込みなんてどうでもよくなるほどに、僕はそういう人たちを見るのが好きだ。強いて言えば、僕という人間が証明したいのはこういうことなんだろう。

× × ×

電車を降りて数十分歩いたところでようやく目当てのアパートを見つける。私の住んでいるアパートに負けず劣らずのくたびれた建物だ。

昨日、灰原さんに電話をかけた。お互いの今後の健勝を祈ってだとか適当なことを言って、今日は二人で飲み明かすことにしたのだ。当然費用は私持ちだ。誰かさんのおかげで財布にも多少なりの余裕ができたことだけには感謝している。

ただ彼女の態度が電話越しでもわかるような空元気だっただけに、約束の時間よりもずっと早い時間に押しかけた。

「灰原さん、白石ですけど」

ノックしてしばらく待ってみるが返事はない。念のため表札を確かめてもう一度扉を叩いてみるが、やはり結果は同じだ。

「やっぱり早過ぎたか」

引き返そうとして踵(きびす)を返しかけたところで、視線がドアノブに引き戻される。馬鹿らしいと苦笑いを浮かべつつも、思わず手を伸ばしてしまう。

そのまま軽く力を込めると、老朽化したドアは軋む音を立てて開いた。鍵のかけ忘れと思い込もうとしたが、怯えの入り混じった好奇心がその考えを押しつける。

「……お邪魔します」

恐る恐る扉を開ける。部屋の広さは私の部屋とほとんど変わらないから隠れられるような場所はない。空き巣や強盗というにも室内は整然とし過ぎている。最初の予想が当たっていたのだと安堵の息を吐いた矢先、部屋の一隅にある机に目が留まる。机の上には封筒と、放り出されたように広がったままの地図があった。勝手に見るのはまずいと良心が諫めるが、今更その言い訳もない。

悪い予感は大抵的中するというのは本当らしい。封筒にははっきりと遺書と記されていた。封筒から手紙を取り出し、私はその文章を食い入るように読んだ。まず家族へ、そして次には友人一人一人に宛てられた謝罪の文が並んでいる。記されている名前は多くはなかったが、その中には私の名前もあった。

自分は今日をもって命を絶ちます。少し怖いけどネットで知り合った人たちと一緒に大丈夫です。今まで迷惑をかけてごめんなさい。そう手短かに記して、文章は締めくくられていた。泣き出してもいいのかもしれないけれど、あまりに実感がなくて力が抜けただけだった。

遺書を用意していたところを見ると、昨晚電話をかけた時にはもう決意を固めていたのだろう。その上で私の提案に頷いたのは、もしかすると私にこの遺書を見せて、警察に通報させるためだったのかもしれない。

机の上にもう一つ置かれた地図に手を伸ばす。このアパートからそう遠くない場所に赤い丸がつけられている。

問題は君の意志、ただそれだけだ。

黒崎の言葉を思い出す。少なくとも昨晚まで灰原さんは生きていた。不幸中の幸いとはまだ言えないが、私はここに約束の時間よりも早くやって来た。

まだ間に合うかもしれない。そう思った時には、私は印のついた地図を握りしめていた。

地図に記された場所にあった建物は、壁を覆うように苔が生えている。とてもじゃないが人の手が行き届いているようには見えない。

建物は屋上をあわせて五階建て。街外れにある廃ビルは人目につかず死ぬには絶好の場所かもしれない。

周辺には立ち入り禁止と書かれた黄色いテープが張り巡らされている。後ろめたい気持ちを押しつけてテープをまたぐ。

建物に入ろうとしたところで足が止まる。入り口の鍵が閉まっていた。今から死ぬという人たちが、わざわざそんな用心を？

私は地図を確認し直した。こんな街外れには他に普通の住宅が連なっているだけで、思い違いということもありそうにない。

「ごめんなさい」

入り口から一步下がり、施錠された扉めがけて手をかざす。ぎりぎりまで小さくした炎の球は、それでも多少の破裂音を立てて錠を破壊する。

建物の中は外観から想像した通り薄暗く、蜘蛛が至る所に巣を張っている。集団で自殺しようと考えているのだから、行きつく先はおそらく屋上だ。足早に階段を探し、はやる気持ちに足がもつれそうになりながら走り続けた。

けれど、二階に上るやいなや、耳をつんざくような轟音が響き渡る。私は足が釘を打ち付けられたようにその場に停止した。実際にその音を聞いたことはないけれど、テレビで聞くような音が正しいのなら、それは銃声だった。

「駄目ですよ、逃げちゃ。死ぬためにここに来たんでしょ。なら逃げる必要なんてないじゃないですか」

まず黒光りする銃身が目を惹いた。その後によく、持ち主の姿が目映る。銃の持ち主はまだ幼さを残した声と容姿の少年だった。少年の前に、スーツ姿の男が腰を落としている。男はこの現実離れした状況を受け入れられず、堪らず笑い出した。

その瞬間、少年は容赦なく男の足に二発、銃弾を撃ち込んだ。つまらない、と無慈悲に蔑むように。

「残りは三人。あとは上か。今回も期待に応えられるような人はいないかな」

込み上げる吐き気をどうにか抑える。少年は、足を撃たれて苦悶の声を上げるスーツ姿の中年を容赦なく引き摺って、開け放たれた扉の向こうに消えた。

「何が起きているの……」

ここに来た人たちは集団自殺するために集まった筈だ。それがどうして拳銃を持った男が現れて、死を覚悟した人たちの脅しているのか。点と点がまったく繋がらない。

私は震える手で携帯を操作した。もう何度も彼女の携帯にかけていたが、再度電話せずにはいられなかった。

耳元で呼び出し音がこだまする。ほとんど期待はしていなかったが、やがて電話が繋がった。

「灰原さんっ、今どこ？」

「……………助っ」

しばらくの間、重々しい沈黙が続いた。私が次の言葉を出そうとすると、やがて電話は切れた。携帯の電池が切れていたのだ。こんな時に、下唇を噛み締めて、早く機種変更しなかった自分を呪った。

ともかく電話に出たのが本人ならば、灰原さんは生きています。予想できるのは彼女がこの廃ビルのどこかにいて、声も出せない状況にあるということだ。

今私がいるのは二階。狩りを楽しむような少年の余裕の態度と言葉。灰原さんがもし一階に隠れていたのなら、逃げる隙は十分にあっただろう。少ない情報を繋ぎ合わせるに、灰原さんはまだ三階から屋上までのフロアのどこかに

隠れている筈だ。

銃を持った少年の姿を思い出す。少年は、私が今までに出会ってきたどの人種とも違う表情を浮かべていた。かつて魔法を使ってしまった時の暴漢は、何かに怯えるように私にナイフを突きつけた。けれどあの少年は明らかに違う。殺すことを——銃を突きつける行為そのものを楽しんでいた。もっと言えば、殺すかどうかなんてことはどうでもいい。銃を向けられた反応自体を楽しんでいるのではないだろうか。男の反応は、きっと少年のお眼鏡に適わなかったのだ。

頭を振って思考を取り払う。今はそんなことを考えている場合ではない。このビルのどこかにいる筈の灰原さんを見つけて、一刻も早く脱出する。

少年が部屋から出てこない間に、私は三階に駆け上がった。各階の構造は基本的に同じのようだった。階段の踊り場を出てすぐに、階層の大半を占めるオフィスと、そこから繋がる狭いテラスがある。あとはエレベーター、男女それぞれのトイレ、給湯室、機械室、非常階段へと繋がる扉。

動いていないだろうエレベーターのことは考えず、他の部屋を探した。まず非常階段を調べようとしたが、やはりと言うべきか、扉は外から何かに固定されて開かなかった。魔法を使えば突破も可能だろうが、物音が目立ち過ぎる上に、そんな場所を調べても灰原さんがいるわけがない。

次に給湯室、機械室。機械室も施錠されていてこちらからは入れない。足音を忍ばせて女子トイレ、男子トイレの順に探すも誰もいない。

残るのはオフィス。私にとっては最も危険な場所だ。相手が拳銃を持っていようと、狭い通路で遭遇すれば魔法なんてものを使えるこちらに利がある。しかし広い空間になるほどその利は活かせない。

私の魔法は、何もない場所から火を起こしたりそれを小規模だが爆発させたりと、物理法則もなんのそのの代物ではある。だが飛ばした火が相手を追尾したり直接相手の服を燃やしたりできるような能力はない。掌から直線状に飛んできたり、直に触れてようやく小さな爆発を起したりできる。速さで言えば、拳銃に軍配が上がる。ただ広い空間に出るほど、こちらの命中精度も落ちる。

何よりの問題は、私自身が人間相手に魔法を使えるかということだ。以前使った時は、ほとんど反射的だった。現に路地裏の時は、ゴミ袋にボヤを起こすことにも時間がかかった。

助けるため。何度も言い聞かせて、その度に胸の前で拳を強く握る。男子トイレの入り口から通路を覗く。人影はない。意を決して踏み出し、オフィスに身体を滑り込ませる。

まだあの少年の気配はない。さっきの様子なら、上って来ていれば声を上げるだろう。

オフィス内には作業用のデスクがそのまま放置されていた。私は身を屈ませてデスクの陰に隠れ、よちよちと部屋を這いずり回る。

そして、ようやく見つけた。けれど、机の下に隠れていたのは灰原さんではなく、学生服を着た女の子だった。

声を挙げそうになる女の子の口を既(すんで)のところで押さえる。女の子はじたばたと身体を動かして抵抗する。その度に机がガタガタと音を立てて、私の焦りを煽り立てる。

「大丈夫だから。助けに来たから」

そう言って抱きしめると、女の子はようやく抵抗を止めて、涙を流し始めた。溢れる涙が、肩を伝って服に染み込む。

これからどうするべきか、周囲を見渡して考える。まだ追手は来ていない。このフロアにいるのは見たところ彼女だけだ。灰原さんを探すためには、四階以降のフロアに行かなければならないが、彼女を置いていくわけにもいかない。

ようやく泣き止んだ女の子から手を放して、机の陰から外を覗き込む。その時だった。後ろから何か固い物が背中に当たる。

恐る恐る首を捻り、後ろを見る。背中に突きつけられているのは、拳銃。先ほど見たものと同じ黒い銃身。それを持って、先ほどまで涙を流していた少女が、私に銃口を向けていた。

「あなたも私を差し出して、自分だけ助かるつもりなんでしょ。助けに来たなんて嘘ばかり」

この娘は何を言っているのだろう。なぜ彼女を差し出せば助かるのか、悲痛に言う彼女がなぜそんなものを持っているのか。疑問に思考が埋め尽くされていく。

「落ち着いて。あなたを差し出すってどういうこと？」

両手を挙げて、ゆっくりと振り返る。銃身を支える彼女の手は震えている。

「私は友達の自殺を止めに来たの。そしたら拳銃を持った男がいて、状況がよくわかっていないの」

「嘘。さっきの人も、優しい言葉で私を油断させようとした」

「その人は……どうしたの」

「さっき死にましたよ」

快活に答えたのは、彼女じゃなかった。拳銃を持った少年は足音をまったく立てず、すでに私たちの背後へ忍び寄っていた。

「どうしてって顔ですね。あそこを見てくださいよ」

少年が天井の方を指差す。その方角にはカメラが取り付けられていた。見回すと、他にも何台も設置されている。監視役と連絡でもとれば、こちらの動きは手に取るようにわかるのだろう。

女の子は叫びと共に身じろぎ、震えていた。やがて銃口を少年に向けた女の子は、そのまま引き金を引いた。いや、引こうとした。

「その拳銃には安全装置ってものがあってね、そこのレバーを下げないと駄目なんだ」

少年は緩慢な動きで銃に手を取り、レバーを下げる。あまりにも自然な動きに、私も銃を持っている女の子本人も動くことができなかった。

「この人、捕まえたから。だから私は解放——」

突として少年が撃鉄(げきてつ)を起こす。鼓膜を張り裂かんばかりの銃声に、私の呼吸が一瞬止まる。

撃たれたのは女の子の右足。続いて少年は自分の持っていた銃で左足も撃ち抜いた。二度目の銃声の後、ようやくけたたましい悲鳴が上がる。

「俺って、正義感の強い人とか自分の考えをしっかりと持っている人が好きなんだ。だから悪辣な犯人の要求に屈してしまう人には興味ないんだよ」

喜々とする少年の視線がこちらに向けられる。無様に背を向ければ、少年が躊躇いなく引き金を引くことは容易に想像できた。

「あれ、お姉さんみたいな人、集まった人の中にいたかな。拳銃も持っていないみたいだし」

「友達を捜しに来たの。彼女の家に遺書が置いてあったから、自殺を止めるために」

冷静に、動じていないよう装った。先ほどの様子から考えて怯えていると気取られるのは危険だ。私が入り入ろうとしたり許しを請おうとすれば、私も眼下の女の子のようになるだろう。

「それはご立派で。お姉さんみたいに口だけでなく行動に移せる人は好きですよ」

「ここにいる人たちは集団自殺のために集まったんだと思ったけど、違うの」

「そうですよ。正しくは、俺が企画した集団自殺の実験に協力してもらうために集まった、ですけど」

「実験？ これが？」

「はい。俺は死に際に人間がどんな反応をするのか、それを色々な角度から検証しているんです。よく言うじゃないですか、火事場の馬鹿力とか窮鼠(きゆうそ)猫を噛むとか。死に近づくほど、人間の行動や価値観は倒錯し、時にまったく瑞々しい存在になる。俺はそれが見たいんですよ」

大仰に両手を広げる姿は、さながら教えを説く教祖のようだ。どことなく、少年は黒崎に似ていた。

「そのために、何も知らない人を集めて」

「ちゃんと自殺を志願している人たちですよ。でも俺以外はどうせ死のうとしていたんだから、いっそ楽しくゲームをして死んでもらおうと思ひまして。今回は一人に一丁ずつ拳銃を渡して殺し合ってもらうことにしたんです。他の人が武器を持っていた方が、俺もいい具合に緊迫感が楽しめるんですよ。それにこれはゲームですから色々ルールもつけましてね。他の人を捕まえて差し出せば一人だけは助ける、みたいな」

「なら、この娘のことは助けないの」

私は目の前でうずくまる女の子を見て言う。彼女は今にも息絶えかねないほど枯れた声を洩らす。身体から流れ出す血は、彼女の苦しみを帯びた生き物のように床を這って広がる。

少年は呻く女の子に注意を移したかと思うと、無造作に銃口を向けて頭部を打ち抜いた。私は耳をおさえることしか出来ず、飛散した血しぶきが顔にかかる。

「だってここにいる人たちは死ぬために来たんですよ。自力で生き延びようとするならともかく、他人を餌にして助かるような真似は納得できなくないですか」

狂っている。理屈がまるで通っていない。この少年は根本から常軌を逸している。

息を呑み、覚悟する。興味がないと判断すれば、この少年は迷わず私を殺すだろう。泣きすがったり錯乱して誤魔化そうとするのは駄目だ。

「それで、お友達でしたか」

銃口を私に向けてから、けろっとした声で話を変える。

「ええ。灰原さんって名前なの。私と同年くらいの女の子の人なんだけど、知らない？」

身体の震えをやっとのことで抑えて、気丈に振る舞う。対等な立場にいると示しているうちは、この少年は私に興味を持ち、殺さない。けれど私が怪しい動きを見せれば、少年は手足になら容赦なく銃弾を撃ち込むだろう。どこかで隙を見つけて、その瞬間に少年の動きを止める。

「名前はハンドルネームしか知らないけど、お姉さんと同い年の女の子の人なんていたかなあ。あまりに印象に残らない人だったら、もう殺してしまっているかもしれないけど」

少年は首を傾げる。その間も銃口は私に向けられている。

「やっぱり覚えていないな。質問に答えたお礼じゃないけど、お姉さんも俺の質問に答えてくれる？」

「質問って、何」

「このビルの扉はすべて鍵をかけた筈なんだけど、あなたはどうやって入ってきたんですか」

好奇に光る視線が、私を嘗めるように見回す。背中を滑る汗は、冷たさを感じさせない。感じるのは嫌悪感のある血の匂いだけ。

「さっき裏口の錠が見事に破壊されていたんですよ。まるで何かの爆発に巻き込まれたみたいに。でも見たところ、あなたはそんな道具を持っていない。あれ、どうやったんですか」

「それは——」

掌に意識を集中する。その間も私は少年から視線を外さない。相手は間違いなくこちらに興味を持っている。だから隙を突くなら今しかない。

自分の身を守るため、友達の命を守るため。直接当てなくていい。身体の一部に当たれば、きっと驚きと恐怖で怯む。その隙に銃を奪い取って——。何度も自分に言い聞かせる。

私は徐に腕を上げて、掌を少年めがけて掲げる。少年は不思議そうにこちらを見るだけで、引き金を引く気配はまだない。油断している。

こうやるの、と私は胸の内です。

どこからともなく生まれた火気が集約し、掌から放たれる。少年はその瞬間になってようやく反応し、咄嗟に身体を机の上に投げた。けれど間に合わない。

放出された熱の塊は、少年の腕に触れて爆発する。少年は短い呻きをこぼして、痛みのあまり机の上をのたうち回った。

私は呼吸を激しく乱した。肩で息をするのがやっとだ。魔法自体にそれほどの負担はない。少しの間、軽い目眩を感じる程度だった。けれど他人に魔法を使ってしまったという事実そのものが、私の動悸を加速させ、胸を握りつぶされたような感覚に陥れる。自分の身を守ったことへの満足感よりも、他人を殺しかけた恐怖が上回った。

少年はしばらくして動かなくなった。

爆発で少年の服の袖が破れ、火傷で赤く爛れた左腕がさらされる。この様子ではしばらくは使い物にならない。

やり過ぎただろうか。そう思って少年の身体を見渡す。右腕は拳銃を握ったまま投げ出されていた。

これからどうするべきだろう。警察を呼ぶにしても、この状況をどう説明すればよいのか途方に暮れた——その時だった。机に突っ伏した少年の身体が突然、人形のように不気味に起き上がった。

「なんだよ今の!? マジック? 超能力? 魔法? なんでもいいや。やっとまた巡り合えた、最高の実験体だ!」

少年は今までとはまるで別人のように変貌した。余裕に満ち溢れた態度は打って変わり、狂気に顔を歪ませている。

ほとんど反射的だった。私はもう一度掌に集中する。意識は散漫だったが、それでも火の粉程度を飛ばすことはできた。

私が放った火の粉は、少年めがけて飛散し、爆ぜる。直撃だった。すぐには動けまい。そう思ったのも束の間だった。

焼け焦げた左腕は力なく宙に投げ出されたまま、少年は即座に右腕の拳銃を構える。

次の魔法を使うために意識を集中している暇はなかった。私は廊下側に走り、少年がそうしたように身体を思いっきり投げ出した。

左腕を銃弾が掠め、血の糸が床に跡を残す。その光景が、私の中から冷静さを消し去った。唯一手にしていた好機を逃してしまった。その事実が、私から正気を失わせた。

私は必死に足を動かした。逃げなければ殺される。混乱した私にまともな判断力はなく、気付いた時には階段を上っていた。

手近な女子トイレに飛び込み、夢中で個室の鍵を閉めた。

どうして私はあんな狂った男と対峙している。警察に任せるべきだった。そもそもどうして私は通報していないんだ。

携帯を取り出すと電源が落ちていた。どうしてこんな時に、と思いながら、私はたどたどしい手つきで電源を入れる。

起動までの時間が待ち遠しい。そう思った時ようやく思い出す。すでにバッテリーが切れていたのではなかっただろうか。

銃声が聞こえ、私は身を震わせる。部屋の扉が、乱暴に開け放たれる。その音はゆっくりとだが近付いてきている。

起動時の待機画面がようやく消える。幸いバッテリーは、少しだけだがまだ残っているようだ。息も絶え絶えになりながら110番を発信しようとする、その前に電話がかかって来た。黒崎からだ。着信拒否しようかとも考えたが、私はその電話に出た。もしもの時のことを考えて、誰かに現状を伝えておくべきだ。まだ僅かに残っていた冷静な思考が、私にそう命じた。

「やあ、元気かな」

「元気なもんか。こっちは殺されそうだっていうのに」

「……状況を説明できるかい」

今いる場所、そこで何が起きているか、私はしどろもどろに説明した。言葉にしたことがかえってよかったのか、少しだけ落ち着くことができた。

「わかった。警察にはすぐに連絡する。一応僕も向かうけれど、今からではすぐに助けるというわけにはいかないだろうね」

黒崎のどこまでも冷静な話し口に激怒しそうになったが、なんとか唾を呑み込んだ。黒崎に怒りをぶつけても状況が好転するわけじゃない。

またどこかの扉が乱暴に開かれた。さっきよりも近い。おそらく次は、階段側の男子トイレを調べ、すぐにこちらにやって来るだろう。

腕から力が抜け、携帯が耳元から離れる。あの男は私を実験体だと言った。きっとあの男はすぐに私を殺さない。手足を奪っても、命だけは奪わないつもりには違いない。そうなった後、自分がどんな目に遭うのかを想像してしまう。身体を隈なく調べられる搔痒(そうよう)感、突き立てられたメスが皮膚を切る感覚。考えただけで、胃の中からありったけの酸が逆流してくるようだった。

「……君。白石君、聞こえているか」

まだ繋がっていたのか、ともいもう一度携帯を耳に当てる。

「さてこれからどうするかだけれど、迎え撃つ準備はできているのかい」

「迎え撃つって、どうやって」

「何を言っているんだい。君は魔法を使えるだろ」

ああそうだ。どうしてそんなことすら忘れていたのか。

「でもあいつはさっき、魔法なんかものともしなかった。痛みなんか感じないみたい。狂ってる」

「それは、相手を殺してもいいという気概で使った魔法だったかい」

「殺すって……無理だよ」

「どうして。現に君は一度その相手に魔法を使っているんだろ。同じことを、少し力んでやればいい。やらなければやられる。今は正にそんな状況だろう」

「できない。さっき魔法を使った時の感覚が、この手にじんわりと残ってて、とても集中できない」

沈黙する。危機感が増すほどに聴覚は冴え渡り、あの男が近付いてくる足音を一步一步捉える。

「誰？」

幼い声が耳に届く。声は隣の個室からだった。私の他にも、ここに誰か隠れていたのだ。声から察するに、まだ中学生ぐらいの女の子だ。もしかすると、さっきの娘の友達かもしれない。

「誰がいるのかい」

「うん。隣の個室に、女の子が隠れていたみたい」

壁越しに誰なのと問いかけられる。声は不安を隠し切れなくなっていた。

「私も逃げて来たの。あなたを差し出そうなんて考えてないから安心して」

安心して。その言葉はひどく滑稽(こつけい)だった。先ほどまでびくびくと震えていた小娘が何を偉そうに。思わず苦笑が洩れた。

「白石君」

電話の向こうで黒崎が呼ぶ。

「話の続きだが、殺そうとする必要はない、とはやはり言えないだろうね」

「何よ、それ。何も解決してないじゃない」

「そうだね。だから僕から三つほど忠告をさせてもらうよ」

「三つ？ そんな時間」

開け放たれた扉が壁にぶつかり、それと共に銃声。あの男は、すぐ隣の男子トイレにまで来ていた。

「一つ目だが。君は今からその男を殺す、ないしは動けない状態に追い込まなければならない。まあ話を聞くに、正気とは思えないその相手には殺す気で臨まないと駄目だろうね。できなければそこにいる娘は間違いなく殺される。ついでに君もだ」

「そんなこと、わかってる」

「二つ目。君の魔法で出した炎は君の意思で消すこともできるだろう。なら今回も同じさ。魔法を使った後は、精一杯助けてやろうと頑張ればいい」

「なんなのその理屈」

「簡単さ。殺さなければいけない人間は殺す。同じように、瀕死の怪我をしている相手は助ける。それだけさ。それとも君は、右の頬を打たれても呑気に左の頬を差し出すのかい。目の前で死にかけている人間がいるのに何の慈悲も抱かずに見捨てるのかい」

「そんなこと、ない」

黒崎が言っていることは至極当たり前のことの筈だった。それなのにどうしてか、私はそれが本当に正しいことが疑った。それから、どうしてそんな疑いを向けているのか考えて、答えは出なかった。つまり私の疑いは、根拠のない難癖と同じだったのだろうか。

「最後に、これは忠告と言うより質問だが。君を殺そうとしているのは、本当に人かい」

「は？」

「人を良心の呵責もなく殺し、重傷を負っても狂喜して這い回るそれを、君は本当に同じ人だと思っているのかい」

こんな時に何を言っているのか。そう嘲(あざけ)ってやろうとした。だが手繰り寄せた記憶は、本当にあの男を人間と言えるだけの証拠になるだろうか。あの悪逆の限りを尽くす存在を、私は同じ人間として見ていただろうか。他人に魔法を使ってしまった時にやって来るあの恐怖。けれどそれは、本当に私が今まで恐れていたものと同じ代物と言えるだろうか。

「そんな得体の知れない者への罪悪感、誰かを助けたいと思う君の想いよりも、本当に尊重されなければいけないものなのかい」

頭の中で、今まで考えもしなかった疑問が次々と押し寄せる。

「やるべきことを、やりたいと思うことを考えれば、自ずと答えは——」

電話はそこで切れた。なけなしのバッテリーが今まで保っていたことの方が奇跡に近い。

頭の中を、幾つもの問いが錯綜する。こんな状況下だというのに、思考する時間はとても長く感じた。砂時計の中で、砂が一粒ずつ落ちていくように、誰かがゆっくりと問いかけてくる。何が正しくて、何を優先すべきなのかを。

困っている他人(ひと)を助けたい？ 助けたい。

襲ってくる他人(ひと)を傷つけない？ できれば傷つけない。

どちらかしか選べなかったら？ 簡単に選ぶことなんてできない。

私を殺そうとしているのは誰？ 拳銃を持つ、狂気に吞まれた他人(たにん)。

私は今何をしたい？ 自分が助かりたい。それから、他人(ひと)を助けたい。困っている人(、)を助けたい。

問いに答えていく度に、過熱していた脳内が冷えていく。ああ、答えはもう出ている。あとはその事実に向き合うだけだった。

足音が一步一步近付いてくる。私は息を深く吸って、吐き出すとともに個室から出た。

扉の前に立ち、もう一度掌に意識を集中する。どのみち行動しなければ命はない。なら後のことは、行動してから考えればいい。

「しばらくそこで待っててね。すぐに助けるから」

個室に隠れた女の子に対して言う。声は自分でも驚くほどに優しいものだった。

私は扉の前に掌をかざし、そこから発せられる熱を収斂(しゅうれん)させた。扉からの距離は十分に取る。

かざした手は依然震えている。もう片方の手で押さえておかなければ、今にも恐怖に敗北してしまいそうだった。

ドアノブが捻られた。扉が開くまで三秒、二秒、一秒。

男は拳銃を突き出す格好で扉を蹴破り、同時に引き金を引く。その姿を頭の中でイメージし、その瞬間に恐怖で怯んでしまわないように念じた。どんな想いを？ 誰かを助けたいと思った子供心を。命に優先順位をつけてしまった残虐な心を。

男が扉を開け放つ前に、私は炎を放った。爆ぜた扉に巻き込まれ、男は扉だったものの破片もろとも吹き飛ばされる。

扉の下敷きになった男が動くことはなかった。生きていられるかどうかは、まだわからない。今度こそ、殺してしまったのかもしれない。

私はその場に頷(くずお)れた。全身の肌が粟立つ感覚。どれだけ言い聞かせても誤魔化すことのできない事実。恐怖が駆け巡り、全身の神経が震えに支配されていく。

すると、個室の扉がゆっくり開く。破裂音に驚いた女の子が、堪らず外に出てきていた。彼女はその光景に目を丸くし、こちらに視線を向けた。弱々しい、涙に濡れた瞳。

その表情を目にして、私を支配しようとしていた恐怖がずっと消えて、身体が軽くなる。ああ、私は、自分の力で、この娘を助けたんだ。

もう大丈夫だからと言うと、女の子は安堵から泣きじゃくり始めた。私はそれを抱きしめて慰める。まさかまた拳銃を突きつけられるなんてことはないだろう。

他人に魔法を使ってしまったというのに、今は不思議なほどに落ち着いている。あるのは疲労から生じる目眩だけだ。

この娘を守ることができた達成感からだろうか。昔の憧れに近付いた充足感からだろうか。今はわからない。

灰原さんはまだ見つかっていないが、生きていられるのならもう心配はないだろう。

一つ腑に落ちないのは、黒崎の言いなりのようになってしまったことだ。でも今はそんなことを気にしている時じゃない。言いなり次いでに、私にはもう一つやらなくてはならないことがあった。

「携帯電話、持ってないかな。救急車を呼びたいんだけど」

× × ×

彼女との電話を終え、僕は廃ビルの一室からは離れたこの部屋を後にする。一階の大部分を占領するこの部屋は、さながら警備室のようにカメラの映像がディスプレイされている。一学生の個人研究に使うには、些(いささ)か以上に大げさな代物だった。鼠入君の両親は、彼自身の行いと、この施設のためにかかった自分たちが稼いだ莫大な資金、そのどちらをより悔やむことだろう。

けれど、そのおかげで面白いものを見ることができた。惜しむらくは、結果としてまた友人を一人失うことになってしまったことか。鼠入君の生死はまだわからないが、生きていたとしても牢の外で会うことは二度とないだろう。

そろそろ警察を呼んで上の階に向かうとしよう。そう意気込んですぐ、出鼻をくじくように携帯が振動する。

「もしもし。あー灰原さんですか。ご協力どうも。手付金の方は確認してもらえましたか。はい。残りは後日。え？ 次の仕事ですか。そうですね……わかりました。近いうちに僕の知り合いが直接出向くことになると思います。その時はまた」

まったく人間は、僅かな刺激を与えるだけで強(したた)かにも醜悪にも変貌してくれる生き物だ。いや、変貌と言うには語弊がある。彼女らは元来その性質を持ち合わせていた筈だ。一人は子供の頃の憧れに近付こうと誰かを守ただけだ。一人はずっと夢見た豊かな生活のために、友人を簡単に売り払っただけだ。

ただ、今後も醜悪さを露呈するであろう彼女の方には、これ以上期待するものはないだろう。僕はそのまま携帯を操作し、友人の男に電話をかけた。

「赤城さんですか。いきなりすみません。今度またお話したいことがありまして、はい、ではまた、あなたの欲する土産話をお持ちして伺わせていただきます」

さて、と気を取り直して廃ビルの階段を上る。友人として、まず鼠入君の生死は確かめておこう。生きていられるなら、彼と会うのはこれが最後になるかもしれない。そう考えると、やはり怪しい思いがある。彼は積極的に話し相手になってくれる良い友人だった。もう以前のように議論を交わせなくなるのは残念でならない。

そして、僕の数少ない友人の中でも、魔女と言う最も奇特定の友人に思いを馳せる。炎を出す魔法が使えたところで、科学全盛のこの時代にはそれほどの利便性や脅威はない。しかしそれはあくまで周囲にとっての話だ。生まれながらに人を傷つけることのできる力を、人を守るなんて傲慢(ごうまん)な願いを叶え得る力を持った人間が、いつまでも普通でいられるわけがない。もし普通でいられたとすれば、それこそその人間の特質すべき異端さだと言えるだろう。そんな相手と友人でいられたのなら、こんな地獄に生まれ落ちた意味も十二分にあったと言える。

そんな僕を、やはり彼女は変わっていると、異常だと言うだろうか。最愛の友人に理解されないと言うのは、少し悲しいが、それも無理はない。なにせ僕も彼女を理解できているわけではないし、往々にして人と人との相互理解なんてものは、成就した試しがないのだから。

× × ×

夕暮れ時の駅前は、平日だろうと祝日だろうと容赦なく混雑している。友人や恋人と待ち合わせをする若者。仕事から解放されたスーツ姿の人々は、ある人は清々しい表情を浮かべ、ある人は浮かぬ顔をして猫背のまま歩いていく。

そんな雑踏の中で、私は人を待っている。恋人でもなければ、友人であるのかも怪しい相手だ。腕時計にちらりと目を向けると、時刻はまだ六時を過ぎたばかり。約束の七時には随分時間がある。仕事が遅くなることを見越して約束の時間を遅くしたが、そんな時に限って毎日のように続く残業がないなんて。仕事を始めてからというもの、自分の間の悪さを呪いたくなくなることが増えた。

人混みが煩わしくなり、時間潰しに辺りをぶらつく。人気の少ない高架下を通りかかって、足を止める。

学制服姿の男女二人が、見るからに柄の悪い男三人組に囲まれている。三人組の男は私と同じぐらいの歳だろうか。

どこかで見たことのあるような光景。近頃は本当に間が悪い。

私はただの散歩中だ。別の道を通ることも、引き返すこともできる。少し考え、溜め息を一つ吐いてからその一団の方に向かう。

「すみません。どうかしたんですか」

虚を衝かれて、男たちの肩がびくっと震える。けれど私の背格好を確認すると、不良たちは揃って鼻で笑う。

「ろくに周りを見ない若者にちょっとお説教してるだけだよ」

不良の一人が答える。大方、どちらも前を見ずに歩いた結果ぶつかってしまったということだろう。

「そうですか。それで、あなたたちは謝ったの？」

「何度も謝りました。でも、ぶつかって腕を怪我したとか、女と歩いて調子に乗りやがってとか言われて……」

男の子が懸命に声を搾り出して訴える。今時古典的な難癖の付け方をする人もいるんだなと、むしろ感心すらしてしまった。

「見たところ大層な怪我でもないし、二人とも十分に謝ったならもう行っていいと思うよ」

「あ、ありがとうございます」

礼儀正しく頭を下げ、二人は走り去っていく。私が現れて気が抜けていたのか、不良たちは獲物を簡単に逃がした。

「それじゃあ私も失礼——」

「おい」

立ち去ろうとして、後ろから肩を掴まれる。さすがにそのまま逃げることはいかないようだ。男たちも、憂さ晴らしになれば相手は誰でもいいのかもしれない。

「ふざけやがって。この怪我の慰謝料、代わりにあんたに払ってもらおうか」

悪役が悦に入るような笑みで言う。怪我の設定、まだ押し通すんだ。

どうしたものかと、前方に目をやる。自販機、たばこの吸い殻、不法投棄されたゴミ袋。走って人混みに紛れられるのが一番だ。でも最悪の場合は、この辺りにあるものを利用して少し脅かせば——私は意識を掌に集中させる。

まずは可能な限り逃げて、それで無理なら……。振り払おうと意気込んでいると、急に肩が軽くなる。

「君こそ、怪我している腕で掴みかかるとか、ふざけやがっているんじゃないのかな」

振り返ると、男の腕を掴みあげる黒崎の姿があった。

「お巡りさん、こっちですよ」

黒崎がわざとらしく声をあげると、不良は何やら捨て台詞めいた言葉を残して立ち去っていった。

「あんなベタな方法でも、存外使えるものだね」

「あんた、いつから見てたの？」

「人間が悪いな。ついさっき来たばかりだよ」

大仰に両手を広げて見せる黒崎。相変わらずの態度に辟易した。

「それじゃあ、奢られに行くとするかい」

居酒屋の前は外にいても騒がしい声が聞こえてくる。当たり前だけれど、暖簾(のれん)をくぐるとその喧噪が一層やかましくなった。

以前、就職祝いに黒崎とやって来た店だ。今日は私が入社して最初の給料日。そして宣言通り奢るため、珍しく約束を取り付けた。

今日は座敷が空いておらず、丁度二席空いたカウンターの一番奥に腰かける。

私はビールを、黒崎はやはりウーロン茶を注文した。

「白石君は今日も、要領の悪い生き方をしていたね」

「どうせ私は要領も間も悪いですよ。会社でも偶々居合わせたってだけでこき使われるし」

「仕事はともかく、日常生活でも無理をすると、いつか身を滅ぼすよ」

「……無理じゃない。後悔したくないし、やりたいからやってるだけ。唆(そそのか)したのはあんたじゃなかった？」

「そうだったかもしれないね」

運ばれてきたジョッキとグラスを軽く突き合わせる。金属のぶつかる音が、空(むな)しく消えていく。

「後悔と言うのは、やはり半年前の自殺のことかい」

ウーロン茶を少し飲んでから、黒崎が問いかける。普段ならば、一杯程度は瞬く間に喉を通っているが、今日は少しづつ口に運んだ。

半年前に起きた廃ビルでの事件。そこで九死に一生を得た灰原さんは翌月、その一生を捨てた。飛び降りたのは、彼女のバイト先である六階建てのデパート。彼女はその屋上から今度こそ自殺した。他殺の線も疑われたそうだが、彼女がすでに何度も自殺を図っていたこともあって、早々に自殺という結論に落ち着いた。結局私は、彼女を助けることなんてできなかった。

「それもあると思う。けど彼女の事がなくても、たぶん私は同じように考えてるよ」

「それはまた、どうしてそう言えるのかな」

「具体的な根拠なんてないけど。でも人って、何もかも順序立てて行動するわけじゃなくて、本能的に動いてしまうこともあると思うの。私にとっては、人助けとかがそれだと思う。そこに灰原さんの事や自分だけが持っている力、それにあんたの回りくどい理屈に言いくるめられて、余計にその行動を後押しする理由になってるんだと思う」

「なるほど。とても愚直な、君らしい答えだ」

相変わらず何もかもわかっているような、偉そうな口ぶりだ。けれど顔く黒崎の眼差しは、少しだけ潤んで見えた気がした。

「あんたには、損とか面倒とかわかっていてもやめられないこと、ないの？」

「おそらく、僕にはそんなものはないんだ。それがどんな感覚かもわからない。だから少し、君のことを羨ましいと思うよ」

黒崎はそう言って悲しげに笑った。他の誰かに同じ質問をすれば、もれなく何のことかと笑い飛ばされるか、適当な冗談が返ってくるだろう。けれど彼は違った。そういったものを、黒崎は本当は見つけることができないから真面目に答える。本当にわからないから、気軽に笑い飛ばすことなんてできない。私が魔女であることに対して感じていたように、黒崎はそんな他人との感覚のズレに疎外感を覚えているのかもしれない。

いつだったか、黒崎は自分が生きる理由は友達を作ることだと言った。彼は友達を作ること、そんな疎外感を埋めたいのではないだろうか。

「そういえば、お金のない人間に奢られれば、お金の大切さがわかるだろうと君は言っていたけれど」

黒崎はウーロン茶の入ったグラスを傾けて、何やら繁々(しげしげ)と眺めている。

「僕の価値観にこれといった変化はなさそうだ」

私は思わず頭を抱えた。この男に対して同情的な考えを持った自分が、馬鹿らしく思えてならなくなった。

「頭使ったら色々モヤモヤしてきたじゃない。折角飲みに来たんだから、もっとパーッとやるわよ」

「また介抱に付き合わされるのは御免だよ」

黒崎と会う機会は以前よりも断然減った。こうして約束を取り付けなければ、来年にはもう会うこともなくなって行くかもしれない。

それでも今は。友達を欲するこの男が寂しがらない程度には、こうして酒を飲み交わすのも悪くはないかもしれない。

× × ×

予想に反して、彼女は足取りも確かに家路を歩いていった。働き始めて、酒癖の悪さも少しは落ち着いたようだ。

僕は一人になり、眠ることのない夜の街並みを歩きながら、彼女の問いをもう一度考え直してみる。けれどやはり、答えは見つからない。

ある哲学者は、我々は笑うから楽しく、泣くから悲しいということであって、悲しいから泣くわけではないと言ったという。けれど僕はやはり、楽しいから笑っているし、悲しいから泣いている。

思わず微笑する。そんな風に考える自分が、彼女のように本能が求める行動を見つけられる筈がない。だから僕は彼女や、彼女と方向性は違えど、自身の本能をさらけ出そうとする人々を尊敬し、彼らを手助けできる友人になりたいと切に思う。彼ら彼女ら以上に僕の渇きを満たしてくれる存在は、他にはありはしないだろう。

「黒崎」

不意に声をかけられる。背後にいたのはスーツ姿の見慣れた男だった。

「赤城さんじゃないですか。こんなところで会うとは思いませんでしたよ」

「少し話したいことがある。できれば人気のない場所で」

彼の口調にはいつにもまして鬼気迫るものがあった。まるで何かに追い立てられるような。

「いつも律儀にアポイントメントを取るあなたにしては珍しいですね。適当な駐車場でもいいですか」

赤城は重々しく首を縦に振る。

移動している間、幾つかくだらない問いかけをしてみたが、どの質問も曖昧な返答ばかりだった。ただ一つだけ彼の興味を惹く問いがあったらしい。

「赤城さんは怒る時、敵意を抱くから怒りますか。それとも怒るから敵意を抱きますか」

「謎かけか何かか」

「いえ。でも同じようなものかもしれません」

赤城はしばらく沈黙してから答える。

「どちらかといえば後者だろう。理不尽な罰に対して覚えたあの抑え難い怒りは、理屈を通り越してやってきた。だがそれで、前者がないがしろにされるわけでもない。どっちにしても、俺の行動は変わらない」

「なるほど。大変参考になる答えでした」

つと、赤城が足を止める。

「俺はそろそろ自首しようと思う。捕まるのが時間の問題なら、自分から出向いて訴えてやろうと思う。俺の行いは本当に間違っていたのか、一つ一つ」

赤城は打って変わって落ち着いた調子で言う。

「そうですか。あなたと話す機会がなくなるのは残念ですが、仕方ないですね」

「ああ、俺も残念だよ。あんたは俺の考えを初めて理解してくれた相手だったから。もう会えないのは、本当に残念だと思うよ」

赤城がそう言い終わると、自分の身体が突然重くなった。かと思うと、今度は身体から何かが抜け落ちていくみたいに軽くなる。

左胸に手を当てると、掌に生温かく湿った感覚が広がる。灯りの少ない暗闇に移動していたからか、それが自分の血だと気付くのにには時間がかかった。

それを血だと認識した途端に、全身に痛みが広がり、立っている力すら奪い取っていく。僕はその場に倒れ、空の方を見上げる。

「俺はこれから自首する。だからその前に、あんたを殺しておく必要があった」

僕を見下ろす赤城は、惜しむような声音で言う。

「あんたに教えてもらって、俺は何人かの人間を断罪した。その内に俺の中に疑念が湧いて、それが確信に変わった」

「……どんな？」

胸から流れ出した血溜りが、少しずつ広がっていく。どうにか身体を仰向けに動かし、雄弁に語る赤城に向き合う。

「少なからずの人間が、あんたを中心に罪を犯している。世間からすれば俺もその一人だ。そいつらはおそらく俺と同じように、あんたと議論を交わすことで今まで意識しなかった、押し隠してきた価値観や本能に気付かざるを得なくなった。自分の考えを無条件に肯定する異質な相手を前に、抗うことができなくなった」

何も無条件というわけではないのだが、反論する気力は残っていないらしい。まだ彼の話聞いていたかったが、どうにも意識が胡乱(うろん)になってしまう。

「だからこのまま、あんたみたいな異質な存在を放っておくのは危険だ」

「……異質で、異端か。なるほど、その通りかもしれない」

変わり者の友人たちに、散々変わり者だと言われた理由がようやく少し理解できた気がした。一つ核となるものを持つ彼らに対して、僕は何も持たない。誰もが持ち合わせている生物的な感情が、僕には希薄だった。だからどんな狂った相手にも、興味を覚えこそすれ畏怖を抱くことはない。そして、現状よりも興味をそそられるものがないとわかると、興味を持った相手のことすら簡単に見切りをつける。

赤城が罪の是非に拘るように、鼠入君が人間の可能性に執着するように、白石君が困っている他人を見捨てられないように。僕には生来執心できた対象がなかった。他のほとんどの人間がそうであるように、僕には捨てることのできない感情がなかった。怒りも、悲しみも、喜びも、一度煩わしくなれば切り捨てることができてしまった。こんな人間なら、変だと言われても仕方がない。

すでに視界は暗闇に包まれている。痛みもほとんど感じない。

残り少ない時間で何を考えようか。僕は自分の人生に悔いが残っているかどうか考えた。予定よりも短い人生だったが、この数年は概ね充実していた。未練が無いわけではないが、恥ずべきものではなかったらう。

考えて、ふと気付く。僕はまだ生きることに少なからず未練があるのだと。死に際にあっても、まだ捨て切れていないものが僕にもあった。

「……なんだ」

口を開くのも億劫だった筈なのに、自然と嘲笑の言葉が洩れ出す。夜の静寂の中、僕は一人で高笑いした。

彼らが言うほど、僕も変わり者ではないのかもしれない。なにせ僕にも、終世捨てられないものがあったのだから。

意識は、抜け出す事のないまどろみに沈む。来世はもっと長く生きていたいと、僕は願った。